

### 時任謙作の青春

伊藤, きよ子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

36

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

1959-08-16

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018975>

## 時任謙作の青春

伊藤 藤 きよ子

此處で時任謙作の恋愛を考える以前に作者志賀直哉のそれについてふれてみることにしよう。

「Cより金を三円くれという手紙が来た。此女の心には貴族的な良心が少ないと思う。金は三円送る」という志賀の日記の一節がある。これが恋人を思う志賀の日記なのである。それは恋愛の対象に對してよりも自家の使用人への主人からの批判に他ならない。初恋の、しかも結婚にまで思いきろうとした恋人に對する思いは何処にもみられない。此の日記を考えてみても志賀の、女中、千代に對する恋愛は凡そどの様なものであつたか想像つくのである。相手が至らねば至らぬ丈自分と共に成長を願う恋愛とは縁遠いそれなのである。

此の点、小林多喜二はあ、い、まい、宿の田口タキに恋をし、ひたすら再生を願って「光を見ることを、望むことを忘れずに清い心持を持っていってくれ」と手紙の中に英語の単語を挿入し、本を貸し与えては相手の人間としての成長をねがってやまない。各々の環境や立場の相違はあつても青年の恋愛に共通するもの、それは対象への憧れをもふまえた精神的なものの色濃いものではなからうか、そこに

甘さや感傷がなくはないが、私は多喜二のあの偉大さの発端に田口タキへの愛の美しさを考えねばならぬと思う。と同じく志賀の文学は又、初恋の千代との恋愛をその基底に思いうかべるのである。つまり多喜二の未だたらぬものに對する包む様な愛情に比して、志賀のそれは相手の女性の長所を一つも見出してはおらず、精神的な何ものも感ずることなく、それでも恋愛しているのだという独善的なものであつた。それは両者の作家的人生の相違とも思いあわせて誠に興味深いのである。

此の志賀の千代への恋愛にみられる現象はすべて「暗夜行路」において謙作の対象となつた女性達にもあてはまるのである。先ず謙作が初めて、阪口、竜岡等と一緒に吉原の引手茶屋で知つた登喜子への恋愛を考えてみよう。登喜子のモデルは作者自身が「私は数少い芸者の知り合いの中でも此の芸者だけは特に通り一遍でない気持があつた。事実その小説の主人公というのは境遇からいっても私自身ではないのだが、人間としてはその頃の自分をモデルとし、其芸者に對する気持も或程度には本当だつた。それにも書いた

ように一人角力で惚れていたのだ」(プラトニッククラブ)と回想しているのであって、つまり「暗夜行路」の登喜子をみる事によって「或る程度には本当だった」という、志賀の当時の恋愛を、千代に對した志賀が「大津順吉」「過去」又は日記などでわかると同じ様にわかるのである。

引手茶屋などにははじめて行った「謙作も竜岡も何かしらぎこちない、気持に促えられて居」ると、こういう世界に出入りするにはあまりにも初々しい物なれぬ青年であるはずの謙作が登喜子について「間もなく其の芸者が入って来た。芸者は若かった。そして変に不愛想にしている三人を見ると取りつき端がないように一寸赤い顔をした。芸者は長い綺麗な襟足を見せて静かに高いお辞儀をした」そして「美しい女だ」と思うのである。その様な謙作の登喜子を見る目は誠に透徹していて、こういう世界にはじめて来て「落着かない気持」でいる若々しい青年の眼とは異っている。物なれた、こういう世界の女性とも幾度かの交渉を持った、大人の風貌が感じられるのである。むしろ初対面の謙作によって観察された登喜子の姿の中に此の世界には珍らしい女性の初々しさが感じられるのである。

志賀は若い時から老成していた、つまり女中、千代への恋愛に精神的なものがみられず「女」というものをしか考えていなかった事にもその事はいえるが、それは又「志賀さんの思想には発展性がない」という事もいまでは批評のひとつの常識になっている様ですがそこから追求する批評そのものの発展のなかった事も私にはふしぎです。思想ばかりでなく、志賀さんの写真をみると明治三三年一八才の時ポートレートで優勝した時の写真の顔をみると、それはすでに完成

された顔なのです。二九才の時武者小路氏や里見氏とうつした写真も他の人とは違って、志賀さんの顔だけが完成された顔なのです。それは発展のない顔というのではなく、完成された顔だという意味なのです」と三上秀吉は述べている。さらに亀井勝一郎は『暗夜行路』における対人関係をみればわかる。感覚の緊密度において、つまり精神年令にかけては謙作は抜群に年上だ。『わずかに年上』ではなく隔絶して老成しているのである。(「知識人の肖像」と謙作を評している。しかし「生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物」(「無常といふ事」小林秀雄)という様に人間の成長はその死に至るまで限らないものだという事である。まして小説家に於いてはそれは必須の事といえよう。三上秀吉や亀井勝一郎は若くしての志賀の完成、もしくは志賀の唯一の長編の主人公謙作の老成を賛美しているが、若くしての老成、完成はどのくらい人間としての価値があるのだろうか。むしろ作者志賀の、若くして完成されてしまった自我は、精神的なものを求めるべき青年らしい恋愛を不可能にし、ひいてはそれが謙作の青春の断面にも浮彫りされてしまうのである。若くしての「完成」「老成」を賛美するよりも若き「未完成」を私は賛美したいのだ。それは「完成」への限りない可能性が含まれているからである。今日一般の批評に上る志賀の思想の発展のなさ、作品に枯淡などとはいえぬ一種のかたまりが出来上ってしまった点など、結極、若くしての「完成」「老成」は一種の「未完成の完成」であって、決して賛美にあたいたるものではない事が、今日の志賀解釈の常識と結びつけて考えられるのではなからうか。

登喜子のモデルである松子は「リスの細君に似ていて、二、三年前自分が受けた印象とは大変ちがって割りに音なしのコンヴェンションナルな女だ」（大正元年九月二一日、日記）とあり、つまりリスとは「暗夜行路」の石本であることも衆知のことである。さてその三日後九月二三日の日記には「自分は松子のことが頭にあって何となく落着いて本などが読めなかった」とある。更に十月五日の日記には「松子も小新ももう自分には新しい刺戟ではない」と記してある。小新とは「暗夜行路」の小稲であり、そのわずか十数日の志賀の松子や小新に対する感情はことごとく「暗夜行路」の中の謙作が登喜子、小稲に対する感情として再現されていることがわかる。異なるところは「暗夜行路」の時任謙作が「末だそういう場所を知らなかった」ため「冷淡を粧いながら妙にドキリとし」つつ阪口や竜岡の後について引手茶屋に遊びに行ったのに対し、此の時の志賀はすでに「彼と六つ上の」女の峯とも交渉が一段落し、放蕩をしつくして来ている時である。だから松子との関係にも「松子は思いキッテサバサバした女だ、馬鹿という程ではない。知識がないのだと思つた」（大正元年九月二九日、日記）と気軽な遊び相手ていどに思われるのだが、それでも後年「特に通り一遍でない気持があつた」（プラトニック・ラヴ）というのであるから、志賀流の恋愛といえるのかもしれない。つまり「山科の記憶」その他二、三の短編で示された祇園の茶屋の仲居にふと感じた、妻に失せてしまっている官能の魅力にひかれる、精神的なものの少しもないそれと共通するものと考えられる。その様な志賀が「暗夜行路」で松子を登喜子として、謙作をその様な場所に不馴な初心の青年として「あれほど一人先走りし」「力瘤」を入れて思いつめる青年をえがこうとしても、

結局創造性のとぼしい作者の手になる限りそれはその当時の作者自身の再現にしかならぬ意図に反したものが出来上ってしまうのである。本を売って金を工面して再度登喜子のもとに出かけるが、それほど苦心して出かけるのに、「深入した話をしようとは初めから少しも思つてはいなかった」と生活に余裕のあるものの気まぐれな遊びがあり、指を「握る時の感覚と其の握られた感覚とを計ってみたり」する苦悩のない官能的なものであった。結局「吉井が自分と会おうと叔父さんと会つてようだといつたそうだ。白秋も賛成して老成した人だといつたそうだ。自分のある一面を見た、當つた言葉として自分はウケ入れる」（明治四四年二九才、日記）と、落着きとか、思慮の深さ等は免も角、その様な志賀の風貌がそのまま謙作のものとしてあらわれ、愛子との恋の失敗に胸うづく初心な青年をえがこうとしたところで形象し得なかつたのである。

その愛子との恋には謙作の他の女性達に対する様な官能的なものはない。如何にも青年の初恋らしく、プラトニックな恋をえがこうとしているが、その恋愛は抽象的であり類型的である。謙作の対象となる愛子も、登喜子が美しい茶屋女として、生き生きとえがかれているのに、影の様に唯、名前が出て来るにすぎぬ存在である。愛子は、志賀文学に必要なモデルが無かつた、という事にも原因するのかもしれないが、更に「仮りに直接の交渉をしたところで、それは却つて愛子を当惑さすだけのものだという気が彼にはあつた。愛子は何方かといえはそういう風の女だった」という様な、自分の生涯を決定する重大な結婚に対してさえ、何等意志表示をなさぬ、それ丈でも日常の心象風景のつまらなさが推測される。唯、優しさのみ

を唯一の美德とされた従属的な女性として作者が扱っているのであるから、当然影の様な存在としてしかえがききれなかったのである。つまり謙作が真剣に恋をし破れた相手の女性が従属的な女性としてえがかれてゐる事は当時一部に女性解放は叫ばれていても、女性性は所詮封建的な殻の中に閉じこめられ、又そうある事が女性の美しさでもあったことに原因する。だから愛子が結婚に何等の意志表示をなさぬ事は至極当り前な、それ丈今日からみると悲しむべき現象であつたのである。それが進歩性のない作家、志賀によつて扱われる時、愛子の様な女性が謙作の初恋の対象としてえがかれるのは当然といえよう。

お栄への結婚申し込みの動様について彼は尾道から独り四国への旅に出て、屋島で「心から自分の孤独を感じ」そして「何といつても感情的に一番近い人間はお栄だ」という心が結婚を思い立たせるのである。「祖父の妾だった女」「年の余りに違ふ事」などのハンディキャップを乗り越えて、一人の青年が結婚に踏みきろうとする。それは単にそこ丈を切りとつても充分に小説的プロットの成り立ち得る筈のものである。新鮮さのあふれるはずのものである。ところが「暗夜行路」においてそれが感じられないという事、それは前述もしたが、かなりの障害を踏み越えて結婚しようとするには、それに価するやみがたき相手への思慕、苦悩が伴うものである。しかし此処にはそれほど愛の激しさも苦しみもない。年上の、祖父の妾だった女性との結婚にまでつきつめねばならぬ謙作の思いがあふれていないからだ、そこでその謙作の考えは、人情話めいた、作全体の単なるエピソードめいたものに終つてしまうのである。

る。

「暗夜行路」に落着きはあつても、生き生きとした精神の躍動が無いのは矢張り謙作の行動が決して踏みはずす様な激しさ、新鮮さを持たぬ事であつた。だから謙作自身にとつてかなり突飛な、新鮮であるべきはずの事件お栄との結婚、を思い立たせながらその動機は決して異性への愛の激しさ、情熱などというものでなく、肉体的衝動が孤独の代償を求める親近感と結びついたものであつた。以上のことは謙作の老成してしまつた態度とも結びつけられる。お栄との結婚を思い立たせるのに激しい愛の交換もなく身近に感ずる親近感のみで結婚しようとする態度は、謙作の持つ誠実な反面がうかがわれなくもないが、しかし、そこには、すでに過去に生きる人間の姿がある。前途に夢を持って歩、一步前進すべき若さが感じられない、したがつてその結婚に対しても、妻との暖かい生活をえがく青年らしさの失せた、さとりすました動きのない固定した姿が感じられる。そこにも「老成」もしくは「完成」してしまつた謙作の風貌が感じられるのである。

以上に述べて来た様な謙作の女性観は、最後に恋愛をし、結婚した直子に対しても例外ではない。謙作は直子にも精神的なものも求めなかつた。「大柄な肥つた」「豊かな頬が赤く色づいてゐる」まことに熟した果実の様な直子を初めて見た時「自分ながら初心者らしい心持になつてもうその方を見られなかつた。そして息苦しい様な幸福感に捕えられ」たのである。それは吉原で登喜子に感じたそれと大差はない。勿論如何なる精神的恋愛に於いても最初はその顔や姿に或る感情を支配されるのではあるが併し直子に恋をした謙作

には熟れた果実に食欲をそそられる、その様な官能的なものが強く感じられる。それは結婚するに至った恋愛であるから登喜子に対してとった「深入した話をしようとは初めから少しも思っていないなかつた」という様な警戒心のある遊びはなかつたが、謙作が直子によって高められ、深められるという種類の恋愛ではなかつた。登喜子やお栄に求めた、「人間」としてよりも「女」として、「精神的」なものよりも「肉体」を主にした、それらときわだった区別のできるものではなかつた。つまり謙作は直子との結婚に至るその恋愛期間中に、あの登喜子はじめその他の遊女にした様に謙作特有な冷静な観察をして一喜一憂したのである。二度目に直子を観た時「手拭を姉さん被りにし、寧ろほんやりと箒を持ち、注意を奪われ切つて其美しい女の児の方を見ている所だつた。此の事は彼には幸だつた。けれども同時に其人の顔には昨日の様な美しさがなかつた。彼は多少裏切られた。一々こんな事で裏切られて居ては仕方がないと自分で自分を食い止めたが、其内女の人はふと彼から見られて居る事を感じたらしく、そして急に表情を変え赤い美しい顔をして隠れるように急いで内へ入つて了つた。彼の胸も一緒にどきついた。そして彼はその人のその動作を大変よく思い、いい感じで、其人は屹度馬鹿でないという風に考えた」のである。謙作は一目で恋をした女性を二度目に観察する事によつてはじめて「馬鹿でない」事を知つたのである。では自分の恋愛の対象が馬鹿であるかどうかかわからずに好きになつたのであるうか、という反問をしたくなる様な、つまり直子に対する唯一の内面的な観察が「馬鹿でない」という言葉で表わされたという事は、女性に対する無意識な軽蔑が「馬鹿」などという言葉を恋愛の相手に対し考える結果になつたのである。そ

れをつきつめれば「大柄な肥つた……豊かな頬が赤く色づいていゝ」その直子に魅かれたのである。だから二度、三度と逢つての観察も女の一寸した表情の変化、動作の変化の中に美醜をかきわけてのみいる。つまり直子を内面から観察しようとしなさい、というのは女性の精神生活の深淺などはどうでもよかつたのだといえる。だから結婚までの短い期間に偶然（謙作は求めて直子と話しあおうとする機会を待とうとしなかつた）二人丈になつた機会にも、決して直子の内面生活を知ろうとしなさい。かえつて直子の方から「私は文学の事は何にも存じませんのよ」と披瀝するのであるが勿論文学など知らぬ方が謙作には好都合である。「今の彼は細君が自分の事に特別に理解があるとか、ないとか、そういう事は何方でもよかつたのである」「寧ろ『文学が大好きです』と云われる方が堪らない」と文学などを知つて人間的な目醒めを多少でも持っている女性よりも自分の意のままに動き、つくられる女性がその理想像であつた。つまり自分の恋愛の対象を対等の立場で、人間対人間の心のふれあいを求める事などは論外の事であつた。それは日本に育つた一つの独特な男女の型、謙作自身が、そしてその求める女性の理想像が典型的な日本の古さの型であるならそこに育つ恋愛も又典型的な古い型の恋愛なのである。それは決して「暗夜行路」の時代までといいきれぬ現在にも連つている事柄なのである。だから直子も知性美とか個性美にあふれたものではない。その美しさは、主情的なもので強力な男性の力にあづかつてはじめて發揮できるもろい美しさなのである。結局、お栄と結婚しようとした謙作の中にあるもの、又放蕩し、引手茶屋、待合で遊んだ謙作の中にあるものが、結婚というノーマルな型をとつて直子に対した丈である。だから謙作は直子との

婚約中にも放蕩し、そしてその反省の中に、「これから本当に慎み深い生活に入らなければ、結局自分は自分の生涯をそのため破滅に導くような事を仕かねない」と自己をいさめてはいるが、今日見合いをし、近く結婚する直子に対する申し訳ないという罪の意識は微塵も持たぬのである。

この様な謙作の恋愛を河上徹太郎は「現代で稀にみる恋愛関係である」といい小林秀雄も『暗夜行路』は傑れた恋愛小説である」と述べている。河上はその理由として「現代人は人間全体で恋愛する事が少く頭で恋愛したり末梢的な神経で恋愛したり、恋愛的な場面や恋愛的な部分はあるが、人間対人間が取り組んで恋愛する事がないからである（中略）然るに各瞬間常に無心で渾然たる感受性を以って一步一步足許を照し乍ら暗夜行路を辿る謙作には、そういう人間性の分裂はあり得ない」と又小林秀雄はその理由として『暗夜行路』には恋愛の戯画に類する様なものの片鱗さえない。登上する男女の間に心理上の掛引など一切見られない。すべては性慾という根底的なものに根ざし、二人が言わば行為によるその理想化に協力する有様が熱烈な筆致で描き出されている。恋愛とは何を置いても行為であり、意志である。それは単に在るものではなく、寧ろ人間が発見し、保持するものだ。だから恋愛小説の傑作の美しさ真実さは、例外なく男女が自分等の幸福を実現しようとする誓言に基くのである」と、共に亀井勝一郎が謙作の「原始人」ぶりを賞賛すると同じ様なみでその近代人特有の分裂的でない恋愛を賞賛している。勿論恋愛の定義づけは不可能な事である、何故なら分析すれば消失してしまうにちがいない極めて総合的なものであるから。しかし

私は前述の様にこれが若し恋愛と名づけられるなら、極めて男性本位の古い型の恋愛であり「傑れた恋愛」とは考えられないのである。

謙作が近代人としては、不具に等しい人間であった。つまり近代社会に住んでいる限り大なり小なり圧迫を受けねばならぬ経済力の問題、階級の問題を知らぬ、いわば近代社会に生きながらその世界を隔絶している事は衆知のことである。それも芭蕉に代表されるあの社会への後むきの孤独の姿勢とは異なる。此の謙作の青春像はそのまま志賀の反映でもあるのだ。「廿代一面」という明治四五年代、直哉三十才当時の、志賀直哉及び白樺派の人々の生活の一面をえがいた小説によると、勿論「廿代一面」としてある通り、すべての生活ではなく、「一面」であり英介（直哉）も、伊作（淳）も小説を書くという目的のため励んでおり、他の友人達もそれぞれ仕事（小説を書くこと）を持っているのだという事をほのめかしてはいるのだが、しかしそんな事は弁明していどにしかならぬほど、くだらぬ生活がえがかれているのだ。後年「あの頃の自分の生活というものは、午頃起きる、不愉快な元氣のない顔をしているそして二時か三時になると自家を出る、友達の家に行く、誘い出して街に出る、何処かで飯を食うそして遊び歩く、夜十二時頃帰って来る（中略）大学を中途退学し、毎日こういう生活をしている。これを自家の者の眼で見れば凡そ不しだらな希望のない生活に見えたるう祖母や父が自分の為に心配し腹を立てた気持は今考えれば至極無理のない事であった」（青臭帖）と作者自身も述べる様に乱れた生活のくり返しだったのだ。金に不自由しないそのめぐまれた環境に何の疑問も持たず旅をしたい時に旅をし、自家の用人をあごの先で使い、遊女とた

わむれ、それでも我々は「仕事だけはしようとし」ているのだとその生活に注釈をつけている。それは「一見無頼や放蕩と見える生活の背面に、もっとあざやかな一つの意志、青春の祈りが流れている」(三好行雄)というが、文学という共通な仕事はあったろう、しかし、文学をすれば当然突きあたる壁、つまり彼等の育つたためぐまれた環境とそれをささえている社会機構のあり方に何等の疑問も反省も持たなかった。それは三好のいう高尚な「無頼や放蕩」ではなかったのである。だからこそ同年代に生きながら「啄木の青春が突き当たった世界とははじめから無縁だった」(三好行雄)のである。しかしこれら白樺派の人々の青春のゆがみともいえるものは何によってすくわれたか、それは彼等のめぐまれた財力と、豊かな資性とは結びついて充分に芸術を極める事が出来、それがそれぞれの個性のもとに表現された事による。ディレッタントイズムの出発が本物になったのである。誠に「環境のおかげをこうむりすぎている。秀れた才能ではあるにしても戦いといったものではなく環境から生まれただけのものにすぎぬ」(荒正人「大正文学展望」)といえるのである。結局謙作も又作者志賀及び白樺派の人々にみられるそれと全く同じ生活態度なのであった。

謙作の父から出ているのか、母方の祖父から出ているのかははっきりしないが、その経済力は、近代人の様に権威や経済力のために分裂的に生きる必要がなかったのである。そこで謙作は直子を全身で考え恋愛を成就させた。しかし謙作の様に外的圧迫を受ける事なく、気ままに生きられ、それに何の反省も持たぬ人間が、他に何も考えなくてよい人間が恋愛をした場合、全身を打ち込むかに見える

のは当然の事であって決して謙作の立派さとはいえない。小林や河上のいう様に戯画的な恋愛、末梢的な恋愛に謙作の様な生き方をするものに、良くも、悪くも出来なかったのである。だからといって万葉人の持ったあの雄大な恋愛を混同してはならない。万葉歌の数々にうたわれた、素朴な激しい恋はその時代の生活を精いっぱい生きて人間の、その生活とのたたかひの中の恋愛なのである。しかし謙作は前述の様にその時代の生活と激しく対決するどころか、環境に不満を持たずただちに旅に出たり住居の移転が出来、不思議なほど気ままに生きる人間の恋愛なのである。その上周囲の人々はお柴をはじめ信行にしてもすべて善人であり、誠に謙作の一人天下である。その様な謙作のあり方を亀井は原始人の近代病に毒されぬ姿と混同して考えているが、近代社会に生き近代社会の特異な恩恵を受けながら、近代人として半端な生活をしているからといって、それを原始人の持つ素朴さと結びつけて考えるのはおかしい。原始人の雄大さはその原始社会を全身で受け入れ生き抜いた偉大さと素朴さだ、ところが謙作のそれは社会とかけはなれたところに無神経に生きた姿である。そして考えることは当然恋愛なら恋愛の問題のみであつたらう。

誰でも恋愛した場合、その恋愛を感じると同時に相手は自分をどう思うかと臆病な観察をはじめるのがふつうではなからうか。それは恋愛自身が相手に自分を与えてしまうと同時に相手を全部所有してしまわねばすまぬ精神状態の混然とした姿であるからだ。そこで双方が闘いと名づけられるほどの血みどろな精神の交流が始るのである。不幸にして相手が反応を示さなかった時悲しい片思いの現象が生ずる。「ボヴァリイ夫人」のエンマに対するシャルルの終生変ら

なかつた愛は悲しい片思いの典型である。それは全く相手から無視されるというよりもそのお人好しの凡庸さをいみ嫌われたという点に於いて。古来恋愛歌は、相手への憧れを含めたやみ難きおもいをうたいあげたものであるが、それは小説にもあてはまる事である。そのいみで相手の心情を無視した恋愛が最上のものとはいえず、それを素材とする小説に相手を見初めた恋愛小説は成立し得ぬのである。ところが謙作は直子を見初めて結婚するが、その話の進行の途中唯一度直子と話をする機会を持ったのみで結婚してしまふ。それも相手の女性の結婚に対する心境など最初から無視している。謙作は直子の周囲を手づるから手づるへと有力なコネを得て何のさしさわりもなく結婚してしまふ。一体直子はどうかと思わざるを得ない程謙作の一方的な感情が此の恋愛を成立させてしまふ。勿論一人称的三人称で此の小説が書かれているのだから当然謙作の側からのみの心境しか述べられないというなら、直子は一体自分をどの様に考えているか、という臆測めいたものがあつてもよいはずである。結婚に際して男性の意見は尊重しても女性のそれは無視してもよいという作者の意識がこの様な謙作の恋愛又は結婚に対する態度として出て来ているものと考えられる。その上作者は「暗夜行路」の最終章に於いて直子の側から直子の心理をえがいて感動的な結びとして描いている。それと同じ様に、直子が従兄弟との過失の場面も謙作を通してでなく直子の側からの客観的描写をしている。つまり後編の重要な箇所を作者は意識的に此の様な手法でえがき成功している。若し「暗夜行路」が「すぐれた恋愛小説」なら、その恋愛に際しても或る程度の内面描写を直子の側からすべきではなかつたらうか、結婚までの短い期間の恋愛に於いて作者はもう少し直子を尊重

すべきであつた。そこには恋愛に伴う苦悩もない、互の心理的、肉体的綾の微妙さもない。周囲のハンディキャップも全く無く、それで謙作の思いがすらすらと実現されたという、恋愛小説にふさわしいお膳立があまりにも無さすぎるのだ。

傑れた恋愛小説とは積極的であれ消極的であれ、それが時代の中に精いっぱい生きていく人間の恋愛として描かれたとき、はじめてそういふものではないか。近代社会に生きる人間の恋愛がたまたま分裂的であつてもそれはその時代に生きる人間として当然の恋愛のあり方なのだから詮方ないことであらう。決してその時代の類型的な恋愛をえがけといふのではない、近代社会に生かれば当然分裂的、末梢的恋愛をせざるを得ぬ社会条件の中で個々の人間の個有的な恋愛がえがける筈である。社会を脱落しながらそれでいてその社会の恩恵を十分受けて生きていく人間の独善的、一方的恋愛の押し進め方を「原始人」のそれと錯覚して過大評価すべきではないと思う。

第一次大戦から第二次大戦への時期を生きた二人の典型的なタイプ、パッショネットのジャックとリアリストのアントワースをえがいた「チボー家の人々」を考えてみよう。母はなく、がんこな父と兄と老婢の下に育つたジャックは、カソリックの家庭の古さ、特に父に古い反抗を示す。母の無い悲しさは彼の心を暗くするが決してじめじめとその様な環境に停滞してはいない。父への反抗、母の無い寂しさその他のものを踏み台にして彼はもっと広い新しい次元に生きるべく出発している。それらの中でジェンニーとの恋愛は始まる。二人とも社会の渦中で押し寄せる時代の波を体でいっぱい受けなが

ら永い年月を愛しあった。その恋愛はあくまでも相互的でそして又二人の闘いでもあった。あの小説は青少年向きの文学などといわれるかもしれない。又中村光夫のいう様に「職業化した近代リアリズムの手法」でえがかれていたため「二度目に読んだ時は最初ほど面白く」はないかもしれぬ。しかし現代に生きる青年なら、あのジャックとジェンニーの恋愛には深い感動を受けるはずである。それに比べて「暗夜行路」を読んで「幾年ぶりではほんとうの恋愛小説に出あったろう」(小林秀雄)と謙作と直子の恋愛に誰が感動するであろうか。私の知ってる範囲の青年たちは誰もそうは云わなかった。

ジャックとジェンニーの恋愛はフランス文学の生んだ恋愛であり積極的に社会とたたかって生きた人間の恋愛であるが、ひるがえって我が国の小説を考えてみれば、「それから」の代助と三千代の恋、つまり父と兄の経済力のバックの下に無為な生活を送る代助のあの

## 夕顔の作者について

源氏は、目にふれ、耳にとまる、興味のあるものは、すべてとりこんで内在化してしまう人間である。五条の「らうがはしき大路」に、あやしく咲いた夕顔の花に、源氏は、ふと心をひかれるのであった。

「切懸だつものに、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひか

様な非社会的な生き方も、明治の社会のゆがみを悲しいほど知りつくした知識人の消極的ながら社会を意識した姿である事は衆知のことである。謙作の無為な生活態度と、同じ様に無為な生活ではあっても根本的に異っている。だから代助は三千代との恋愛によって自己の生活を破滅にまで導くのである。

作者は「小林秀雄君と河上徹太郎君が『暗夜行路』を恋愛小説だといった事は私には思いがけなかった。然しそういう見方も出来るという事は此の小説の幅であるから、そのいみで嬉しく思った」(続創作余談)と述べているが私にはどう「幅」をもたせても、此の小説が傑れた恋愛小説とは考えられないのである。

(一九五八年本学日本文学科卒)

佐藤雄二

かれるに、白き花ぞ、おのれひとり、ゑみの眉開けたる」

あやしく咲いた夕顔の花。すだれを透してみえる女たち。「誰とか知らむ」と思う。誰か知らぬが、女が、香をたきしめた扇に歌をかきつけて、花にかこつけて源氏に贈ったということもある。「にくしとこそ思ひたれな」と、扇をよこした住人を知りたいと思った